

調査報告

台湾の神と仏をたずねて

—二〇一三年度、二〇一四年度の調査から—

名古屋大学大学院人間文化研究科 吉田 一彦

台湾の調査

台湾は信仰が今に生きる国であり、人々と神仏とが親密に交差する島である。街角にはそここに大小の廟があり、そこで神々がまつられ、しばしば仏菩薩がともにまつられる。寺院では仏菩薩がまつられ、しばしば神々がともにまつられる。人々は神々や仏菩薩の一つ一つにあつく祈りをこめて順に線香をあげていく。祈願が成就したときは、特別の御礼の参拝をする。

神信仰と仏教との融合は、日本では「神仏習合」と呼ばれ、これまで日本の宗教の大きな特色の一つだと論じられてきた。しかし、神信仰と仏教の融合は、アジアのあちこちにごく普通に見られる宗教現象であり、ことさらに日本の宗教の特色だといったる謂われはない。むしろ、アジア諸国に広く見られる神仏の融合の諸相を相互に比較し、その広がりの中で日本の神仏の融合を考

察し、それらに共通に見られる特質を明らかにするとともに、地域ごとの差異、個性を明確にするような研究が必要になると考える。

私たちは、科学研究費の補助を受けた共同研究「東アジアにおける仏教と神信仰との融合から見た日本古代中世の神仏習合に関する研究」(基盤研究(B)、研究代表者吉田一彦、平成二一〜二五年度)、および「日本における仏教と神信仰の融合に関する総合的研究—アジアとの比較の視座から—」(基盤研究(B)、研究代表者吉田一彦、平成二六〜二八年度)を実施するにあたり、二〇一三年度、二〇一四年度に台湾の廟、寺院、博物館などの調査を行なった。以下にその概要を記しておきたい。調査は二〇一三年九月一五日〜一八日と、二〇一四年一月二一日〜二四日に実施した。対象地は次の通りである。

二〇一三年九月
一五日 台南市…祀典興濟宮、大觀

音亭

一六日 台南市…五妃廟、法華寺、

城隍廟、開興堂、台湾府城

城垣・南門・碑林、臨水夫人媽廟、延平郡王祠、台湾

府城隍廟、清水寺、孔子廟、

大天后宮、祀典武廟

雲林県北港鎮…朝天宮、世

一七日 界媽祖北港會

一八日 台北市…龍山寺、大龍峒保

安宮(祈安礼斗法会)、国

立故宫博物院

二〇一四年十一月

二一日 台北市…指南宮、慈祐宮

二二日 台北市…故宮博物院、忠烈

祠、孔子廟、大龍峒保安宮、

臨濟護国禪寺

二三日 台北市…新北市…関渡宮・

広渡寺、玉女宮、黄帝神宮、

龍山寺(淡水区)、福祐宮、

幸海宮、聖江廟、和衷宮、

行天宮、台北天后宮

二四日 台北市…臨濟護国禪寺(水

陸普度大斎勝会)、北極府

玄天上帝廟、龍山寺、地藏

王廟、大衆爺廟

二〇一三年度の調査は、上島亨、

佐藤文子、荒見泰史、曾根正人、関

山麻衣子、坪井剛、高志緑の諸氏と

ともに行ない、また荒見泰史氏の紹

介により南華大学の鄭阿財教授(敦

介により南華大学の鄭阿財教授(敦

煌学研究センター主任、文学博士」と学術交流し、北港の朝天宮をご案内いただき、種々のご教示にあずかった。心より御礼申し上げる次第である。二〇一四年度の調査は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科院生および修了生の市岡聡、柴田憲良、浅岡悦子、小野純子、大澤尚久、井上友莉子、手嶋大侑、城浩介とともに行った。

神々と仏菩薩

調査の初日、私たちは最初に台南の興濟宮（祀典興濟宮）および観音亭（大観音亭）を訪れた。宿から一番近くにある廟で、予備知識なしに訪れたが、多くの知見を得ることができ、大変感激した⁽¹⁾。この寺廟は、向かって右の入り口を入ると興濟宮で、保生大帝などがまつられているが、左の入口を入ると観音亭で、観音仏祖などがまつられている。だが、両者は内部でつながっており、一体の施設になっている。神々をまつる廟と仏菩薩をまつる仏堂とが連結した一体の施設になっているのである。保生大帝は⁽²⁾、病気を治してくれる医薬の神である。興濟宮はこの保生大帝を中尊とし、その向かって右と左に中壇元帥、福德正神がまつられる。さらに通路を進むと後殿が

あって、聖父・聖母の牌をはじめとして、文衡聖帝、関聖帝君、上元天官大帝、中元地官大帝、下元水官大帝など多数の神々がまつられる。

一方、観音亭は観音仏祖を中尊とし、達磨祖師や大聖爺や準提菩薩などがまつられ、その向かって右と左に月下老人、註生娘娘がまつられる。月下老人は縁結びの神、註生娘娘は子授けと安産の神である。こちらの後殿は「大雄宝殿」になっていて、釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来をはじめとして多数の仏菩薩や関帝などがまつられる。

このようにこの施設には、多くの神々、仏菩薩が立体の神仏の曼荼羅のように配列され、それがあたかも両界曼荼羅のように並列的に配置されている。私たちが訪れた時、観音亭では数人の女性の信者たちが列立して読経をしていたが、その間も観音亭に、また興濟宮に参拝者が次々におまいに来ていた。

保生大帝の廟としては、ほかに台北の大龍峒保安宮⁽³⁾を訪れた。ここも保生大帝が中尊にまつられ、本殿を取り囲む回廊には、向かって右側に天上聖母（媽祖）、福德正神が、左側には西秦王爺・田都元帥、太歳聖君、註生娘娘がまつられる。後殿には、神農大帝、至聖先師（孔子）、関聖帝君、玄元上帝、揚元帥がまつ



大龍峒保安宮

られる。さらに奥に進むと四階だての後棟があり、一階は雲裏庁、二階は付設図書館であるが、三階は大雄宝殿で、釈迦牟尼仏、薬師仏、阿弥陀仏などがまつられる。四階は凌霄宝殿で、玉皇天尊玄靈高上帝の牌を中尊に、東華帝君、金母娘娘、斗姥元君、雷声普化天尊がまつられる。保安宮は、あたかも三次元の神仏の立体曼荼羅のような様相であった。

二〇一三年に保安宮を訪れた時は「祈安礼斗法会」の当日で、私たちはこの法会の準備儀礼を見学することができた。同宮の掲示およびホームページによると、この法会は「民衆消災、祈福、延寿」を目的とする道教の主要な法事で、毎年春と秋に

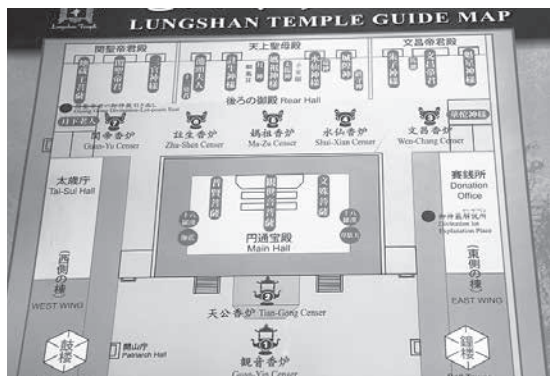
挙行され、秋は農暦の八月九日（一六日（国曆九月一三日～二〇日）に実施されるという。この九月一八日は午後七時三〇分から「延寿斗科」の儀が行なわれ、翌一九日には午前九時三〇分から「敬天迎福」の儀が、そして最終日の二〇日には午後四時から「焰口施食」の儀、八時から「円終吉祥」の儀が挙行されることであった。宮には、「大龍峒保安宮癸巳祈安植福礼斗法会（全家個人）斗登記芳名」が貼り出されていた。

松本浩一氏によると、礼斗法会は台北の多くの祠廟で行なわれる法事で、民間宗教と道教・仏教とが一体になったものであり、多くの場合、道士ではなく、祠廟に付設される「誦経団」によって挙行されているという⁽⁴⁾。この日の法会で読経していた人々は、未確認であるが、誦経団の団員の方々だった可能性が高いように思われる。

龍山寺の観音と神々

寺院はどうだろうか。著名な台北の龍山寺（艋舺龍山寺）は⁽⁵⁾都会の真中にある寺で、夜遅くまで参拝者がたえない。一七八三年の創建で、観音信仰の寺である。この中殿は中央に観音仏祖、向かって右に文殊

菩薩、左に普賢菩薩がまつられ、右左の壁面には十八羅漢と韋駄、伽藍（関帝）がまつられる。これらが仏教系の荘厳であるが、その背後には後殿があり、多くの神々がまつられている。後殿の中央は聖母殿で天上聖母（媽祖）がまつられ、向かって右に水仙尊王、左に註生娘娘が、その一つ外側には右に城隍神、左に池頭夫人と十二婆者がまつられる。聖母殿の右隣は文昌殿で、文昌帝君と太魁星君と紫陽夫子がまつられる。左隣は関帝殿で関聖帝君と三官大帝と地藏王菩薩がまつられる。文昌殿の手前には華陀庁があつて華陀仙師が、また関帝殿の手前には月老庁があつて月下老人がまつられる⁽⁶⁾。



龍山寺の構成

このように龍山寺は仏教寺院でありながら、廟と同じように多数の神々がまつられており、神仏の立体曼荼羅のような様相を呈している。龍山寺の神仏は、正面から拝すると、中尊の観音と背後の媽祖とが重なりあう。台湾には、日本のような本地垂迹説はないが、観音と媽祖は、航海安全の尊格として、また女性性をもつ菩薩（あるいは仏祖）と女神として、同体のように、あるいはきわめて近い仏と神のように認識されているように思われる⁽⁷⁾。

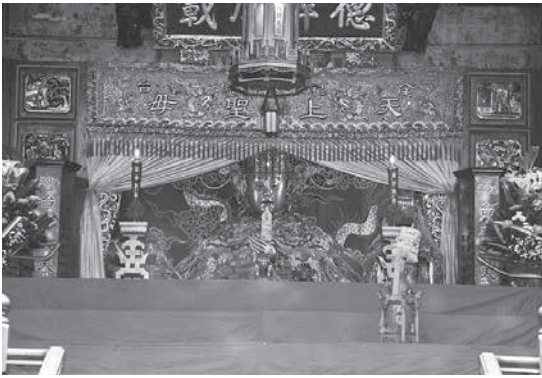
なお、子授けと安産の神である註生娘娘の殿前には、蘭などの花の鉢がたくさん供えられていた。それらの花は、この註生娘娘に祈願して妊娠した、あるいは子が生まれた者が御礼に供えたもので、鉢にそえられたカードには名前や御礼の文言が記されていた。

媽祖の信仰

今回の調査では、媽祖をまつる廟を多数見学することができた。台南の天后宮、北港の朝天宮、台北の慈祐宮、関渡宮、福祐宮、台北天后宮などである。媽祖は海の民たちに信仰された航海安全の女神で、天妃、聖母、天后などという。媽祖の信仰⁽⁸⁾は、北宋時代頃にはじまるもの

で、最初は福建省の莆田の湄洲島からはじまり、漁民、貿易民などの海の民たちによって、中国沿岸部、朝鮮半島、日本、ベトナム、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、沖縄、そして台湾などの広範な地域に伝えられ、各地に媽祖廟が建立されていった。台湾には福建からの移民によって媽祖の信仰がもたらされ、やがて媽祖信仰の一大中心地になった。

台湾最古の媽祖廟は、一五九二年創建という澎湖県の馬公港の天后宮だという⁹⁾。北港の朝天宮も成立が古く、台湾の媽祖信仰の中心の廟となり、毎年、農曆の一月一日から媽祖の誕生日とされる三月二三日ま



台南市大天后宮 媽祖像



朝天宮

での期間、特に多くの参拝者でにぎわうという。朝天宮では、正面の媽祖正殿で媽祖がまつられるが、媽祖正殿のすぐ後ろには観音仏祖殿があつて、両者が重ね合わされるようにまつられている。この日、朝天宮内の三官殿では、道士による道教儀礼が行なわれており、私たちは食い入るようにそれを見学した。この道士の方は朝天宮に所属する道士ではなく、他から招かれた方であるという。同宮には、さらに聖父母殿、文昌殿、福德正神殿、註生娘娘殿があり、多くの神々がまつられていた。

その後、北港で開催されていた「世界媽祖北港会」を見学した。これは世界中から媽祖像を集め、一万体に



世界媽祖北港会

もおおよぶ媽祖像を一せいに展観するという大変雄大な企画であった。私たちが訪れた時、すでに多数の媽祖像がところ狭しと展観されており、

また新たに到着した媽祖像が運び込まれていた。媽祖像は、それぞれ首から宮廟名、聖号、地址（住所）などを記した札を下げて整然と配列されており、まことに壮観であった。媽祖の協侍となる千里眼、順風耳も多数配置されていた。

台北の媽祖廟

台北の慈祐宮（松山慈祐宮）は、新しく開通したばかりのMRT松山線の松山駅を降りると眼の前にある。

ここも媽祖の廟で、一七五三年の建宮だという⁽¹⁰⁾。正殿の中央には媽祖がまつられ、多数の神々がそれを囲むようにあわせまつられている。西廂には福德正神や地藏王菩薩が、東廂には二楼に註生娘娘および十二婆姐と杜玉娘（杜母）がまつられる。さらに正殿の背後には五階建ての後殿がある。ここは一楼が三川殿であり、二楼が太歳殿で斗姥元君と六〇太歳星君がまつられる。三階は仏祖殿で、観音仏祖がまつられ、あわせて南海仏祖、千手千眼観世音仏祖、韋駄護法（韋駄天）、伽藍護法（閻帝）、中壇元帥、文殊菩薩、普賢菩薩、善才、龍女、一八羅漢などがまつられる。四階は諸聖帝君殿、五階は凌霄宝殿で、多くの神々がにぎにぎしくまつられている。ここも三次元の

神仏の立体曼陀羅のような様相であるが、正殿中央の媽祖と後殿三階の観音仏祖とが重ね合わされるようにまつられているように思われる。

私たちが同宮を訪れた日には祭が開催されており、大変にぎやかだった。宮の前には、近隣の台北府城隍廟（松山福樂社）や清水祖師廟などから神輿が来ており、謝將軍と范將軍のパフォーマンスなど、種々のパフォーマンスが順に行なわれ、大いに盛り上がった。

閼渡宮も著名な媽祖の廟である。

ここは正殿の中尊に媽祖（天上聖母）がまつられるが、向かって右に観音仏祖、左に福德正神がまつられ、ここでも媽祖と観音の近親性がうかがえる。閼渡宮には数多くの殿舎があった。正殿の向かって右隣には功德堂があつて地藏王菩薩などがまつられ、左隣には延平郡王三將軍殿があつて延平郡王などがまつられている。また、正殿の後方には一九八六年完成の五階建ての後殿があり、一階が土地公殿、四階が太歳殿、五階が凌霄宝殿になっている。その右隣には古仏洞があり、入口に宝臼、通路に二八天王がまつられ、その奥に中尊として千手観音がまつられている。後殿の背後には財神洞があり、五財神、福德正神などがまつられる。さらに宮の右隣には広渡寺がある。



閼渡宮 古仏洞 千手観音像



松山慈祐宮の祭

一九七一年の建立だという。ここは、一階に阿弥陀仏、観音菩薩、大勢至菩薩が、二階に地藏王菩薩が、三階に薬師仏がまつられる。このように、

関渡宮は、媽祖を中心に多くの神々
仏菩薩がまつられる神仏融合の寺廟
であった。

台北を流れる淡水河は北西へと進
んで海に至る。まもなく海というこ
ろにかかる関渡大橋のすぐ手前が
関渡宮（台北市北投区）である。そ
れをさらに進むと河口の町、淡水（新
北市淡水区）に至る。MRT淡水線
の淡水駅で降りると、若者でにぎわ
う街が広がる。ここ淡水の福祐宮も、



福祐宮 媽祖像

また古くからの媽祖の廟としてよく
知られている。この宮には、中尊と
して媽祖がまつられ、その向かって
右に観音菩薩が、左に海神の水仙尊
王がまつられる。眼下に淡水の埠頭
をのぞむ立地は海の神の信仰の地に
ふさわしく、媽祖、観音、水仙尊王

がまつられている。また、右左の辺
殿には文昌帝君、斗姥元君、財神、
関聖帝君、土地公、月下老人等々の
多くの神々がまつられる。多くの参
拝者が次々に訪れ、線香があげられ
ていく。

媽祖の伝来と僧

これら媽祖の廟には、しばしば僧
によって媽祖像がもたらされ、建宮
されたという話が伝えられている。
朝天宮は、一六九四年、仏教の臨濟
宗の禅師である樹壁禅僧が湄洲の天
后宫の媽祖の神像を奉祀して渡海来
台し、建宮されたと伝える。関渡宮
は、臨濟宗の僧の石興が金身の媽祖
像を奉じて一七二二年に渡海来台し、
建宮されたと伝える。松山慈祐宮は、
泉州の行脚僧の俗名は林守義、法号
は衡真が湄洲の媽祖の分霊で金身の
ものを奉じて一七三七年に渡海来台
し、一七五三年に建宮されたと伝え
る。

これらの伝えはいずれも一七世紀
末～一八世紀の比較的最近の話であ
り、内容に共通性が見られる。これ
らが何らかの歴史的事実を伝えるのか
否かは未検証であるが、媽祖の信仰
が仏教の信仰と融合するように伝来、
展開していったことを示す説話とし
て注目されよう。

日本仏教の残像

台湾には日本統治時代の面影がそ
こに残る。台北では、さらに媽
祖の廟である台北天后宮を訪れた。
ここは西門町の繁華街の真中にあり、
夜遅くまで参拝者がたえない。正殿
の中央には媽祖（天上聖母）がまつ
られ、向かって右に観音仏祖や註生
娘娘が、左に関聖帝君などがまつら
れる。また向かって右側の殿には地
藏王菩薩が、左側の殿には福德正神
がまつられる。ここも媽祖の隣に観
音が安置される。

さらに、注目されるのは、右側の
殿に弘法大師坐像（彫刻、背後に絵
画）がまつられ、また正殿脇に弘法
大師絵伝（四幅）がまつられること
である。入口を入って左側にも弘法



台北天后宮 弘法大師坐像

大師立像がまつられる。

宮誌⁽¹¹⁾によると、この廟はもとは一七四六年に艋舺(万華)の地に「新興宮」として建宮され、その後の火災でも再建されて、規模の大きな廟として大変栄えたという。しかし、新興宮は、一九四三年、防空用の道路を建設するために日本政府によって取り壊されてしまい、信者たちは媽祖像などをとりあえず龍山寺の後殿に安置したという。一方、日本の高野山真言宗は一八九九年に艋舺の新起街に布教所を作り、一九一〇年に「新高野山弘法寺」という寺院を建立し、布教活動を展開した。戦争が終わり、媽祖像などの新興宮の文物は龍山寺後殿から弘法寺に移され、一九五二年には弘法寺は台湾省天后宮へと変わり、さらに一九六七年に台北天后宮と名称変更されたという。私たちは同宮で弘法大師像や絵伝を拝観して大いに感激したが、それらはこうした複雑な歴史を背負ったものであった。同宮には、現在、金剛峯寺と高野山東京別院の僧たちが毎年交替で来て、礼仏法会をしているという。

私たちは、また台北の円山にある臨済護国禪寺を訪れた。日本による台湾統治がはじまると、日本仏教の諸宗派が台湾に進出した。松金公正氏によると、八宗一四派が渡台し、



臨済護国禪寺



臨済護国禪寺
水陸普度大齋勝会の準備

布教を開始したという⁽¹²⁾。臨済宗妙心寺派の場合は⁽¹³⁾、細野南岳による活動があり、やがて台湾総督であった児玉源太郎の支援を得て、梅山玄秀という僧が渡台して、円山精舎(一九〇〇年完成)が造られ、ここを拠点に活動したという⁽¹⁴⁾。これが

臨済護国禪寺の前身である。やがて一九〇六年に本格的な寺院造営のための福田会が組織され、堂舎が建立されて、一九一二年には入仏式が挙行された。こうして鎮南山臨済護国

禪寺が成立し、以後、台湾における同派の布教の中心寺院になったという⁽¹⁵⁾。戦後、同寺は妙心寺派から離れたが、二〇〇八年には同派に復帰し、今日に至っている。同寺には、日本風の建築様式による山門、大雄宝殿が今も残る。

私たちが訪れた時、同寺は水陸普度大齋勝会の期間中で、紙で作られた馬と役人、船などが準備されていた。私たちは午前の『仏母孔雀明王経』巻上の読経の儀を見学させていただき、読経の末席に加えさせていただいた。法会には、女性の信徒を中心に信徒たちが参集して声をあわせて読経していた。同寺では、アメリカ人で、日本の京都の大学で仏教を学び、今では台湾で僧として活躍しているという釋慧宣さんとお会いして、お話をうかがうことができた。

〔注〕

(1) 拙稿「アジアにおける神仏の融合と日本——台湾の廟と寺をたずねて」『在家仏教』七四〇・二〇一四年。

(2) 保生大帝については、朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社、一九九六年。二階堂善弘『台北保安宮と保生大帝』『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』七、

二〇〇〇年。尾崎保子『保生大帝』春風社、二〇〇七年。都通憲三朗「台南の医業神廟について——興濟宮の活動を中心として——」『仏教経済研究』四二、二〇一三年。

(3) 大龍峒保安宮については、廖武治編『大龍峒保安宮』（日本語版、保安宮、二〇〇九年）を参照した。

(4) 礼斗法会については、松本浩一「台北市の祠廟と礼斗法会」『東方宗教』九〇、一九九七年。

(5) 龍山寺については、徐逸鴻『図説 艋舺龍山寺』猫頭鷹出版、二〇一〇年。葉昌嶽『台北・艋舺龍山寺』（中日文対照、二〇一一年）を参照した。

(6) 龍山寺の観音と神々については、窪徳忠『道教の神々』（平河出版社、一九八六年、のち講談社学術文庫、一九九六年）に配置図が掲載されている。

(7) 媽祖と観音の密接な関係については、平木康平「媽祖と観音」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』三二、一九八四年。川村湊「補陀落——観音信仰への旅」作品社、二〇〇三年。林觀潮「台湾の仏教と神々」（立川武蔵編『アジアの仏教と神々』法蔵館、二〇一二年）。

(8) 媽祖については、李献璋『媽祖信仰の研究』泰山文物出版社、一九七九年。窪徳忠『増訂 沖縄の習俗と信仰』東京大学出版会、一九七四年。同「媽祖信仰」(1) (5)『アジア遊学』三七、三九

「四二、二〇〇二年。坂出祥伸「台湾の媽祖信仰」『関西大学中国文学会紀要』一一、一九九〇年。中本泰任「鳥面の航海守護聖母『媽祖』」『海事資料館研究年報』二二、一九九四年。三尾裕子「台湾の女神の女性性——観音菩薩・媽祖・註生娘娘」『アジア・アフリカ言語文化研究』四八・四九、一九九五年。同「媽祖は誰にとつての神か？」（鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）。朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社、一九九六年。野口鐵郎「媽祖」『しにか』八一、一九九七年。松本浩一「船人たちが伝えた海の神——媽祖信仰とその広がり」『アジア遊学』七〇、二〇〇四年、などの多くの研究がある。

(9) 前掲注7林觀潮「台湾の仏教と神々」。

(10) 松山慈祐宮については、葉倫会編著『松山慈祐宮』台北市松山慈祐宮、二〇〇三年。王受寧編著『松山慈祐宮寺廟文化沿革介紹』二〇一二年、を参照した。

(11) 王美文編著『閱讀 台北天后宮』台北天后宮管理委員會、二〇〇七年。王世燁・許嘉文「台北天后宮的歷史」台北天后宮管理委員會、二〇一一年、を参照した。

(12) 松金公正「植民地時期台湾における日本仏教寺院及び説教所の設立と展開」『台湾史研究』一六、一九九八。

(13) 台湾における妙心寺派の活動については、胎中千鶴「葬儀の植民地社会史」

風響社、二〇〇八年。

(14) 松金公正「日本統治期における妙心寺派台湾布教の変遷——臨濟護国禪寺建立の占める位置——」『宇都宮大学国際学部研究論集』一二、二〇〇一年。

(15) 注14に同じ。